

10/12 SAT.

チャールズ・アイヴズ (1874～1954)

答えのない質問

チャールズ・アイヴズはアメリカ的な価値観を体現した作曲家である。生命保険会社の経営者として活躍し、週末には教会のオルガニストを務め、余暇で作曲をする、エグゼクティブ兼音楽家であった。

イエール大学の音楽学部に進学し、ホレイショ・パーカーに作曲を学んだが、パーカーのドイツロマン派至上主義的な音楽観に反発し、卒業後はビジネスの道へと進んだ。アメリカの賛美歌、民謡、愛国歌等の調べをパッチワークのように編み込んだ作風や、異なった調性で同時に演奏する等の実験的な試みは、南北戦争時に陸軍のバンドマスターを務めた父から受けた幼少期の音楽教育の影響が大きかった。アイヴズは音楽で生計を立てることに束縛されずに、理想を追い求め、自由に奔放な創作をした。

〈答えのない質問〉は1908年に作曲され、1930年から35年頃にかけて加筆修正がされた。弦楽合奏、ソロトランペット、そしてフルートカルテットの3つのグループに分かれ、各グループは独立し、強弱とテンポが系統立てて変化していく。

アイヴズは作品を解釈するために短いテキストを書いている。弦楽器が奏する終始ピアノシモで調性のはっきりした三和音は「何も見ず、知らず、聞かないドゥルイド僧たちの沈黙」を表している。これを背景に、トランペットは「存在についての永遠に続く問いかけ」を7回提示し、それに対してフルートが次第に不規則になりながら、質問をあざ笑うかのような無意味な答えを6回返す。また、本公演では、作曲家自身による選択技に基づき4本のフルートのうち、第3フルートをオーボエ、第4フルートをクラリネットで演奏する。

レオナルド・バーンスタインが1976年にハーバード大学で行った音楽についての連続講義「答えのない質問」のタイトルは、アイヴズのこの作品からアイデアを得ている。バーンスタインは第5回目の講義「20世紀の危機」でこの作品について、ト長調で音階や和音を奏でる弦楽器の背景と、無調の旋律を奏でる管楽器の問答が「私達の世紀、音楽は何処に？」という問いかけを音楽で表現している、と解説している。

下道郁子 TEXT by Ikuko Shitamichi

作曲：1908年。1930～35年頃加筆。

初演：第2版は1946年5月11日、テオドール・ブルームフィールド指揮、ジュリアード音楽院大学院生による室内オーケストラ
第1版は1984年3月ニューヨーク、デニス・ラッセル・デイヴィス指揮、アメリカン・コンポーザーズ・オーケストラ

編成：フルート2、オーボエ1、クラリネット1、トランペット1、弦5部

フランツ・シューベルト (1797～1828)

交響曲 第7番 口短調 作品759「未完成」

フランツ・シューベルトの初期の交響曲(第6番まで)は、1年にほぼ1作の割合でスムーズに生み出され、半ばプライベートな場で披露された。そんな若書きのスタイルに、しかし25歳ころの青年は訣別し、作曲家としての成否を賭けた一步を踏み出す。仲間内でシェアされるだけでない、巨人ベートーヴェンを超える大曲を、今ははっきり目指しはじめたのである。

《未完成交響曲》は、この大望の最初の頂点に位置する。「未完」に終わった理由は今もって分からない。ピアノ・スケッチを踏まえてスコアを第2楽章まで完璧に仕上げ、第3楽章に入るとほどなく作曲は放棄されるも、別紙の冒頭ページには「交響曲口短調 フランツ・シューベルト自筆」と書き下ろされている。筆跡はきわめて流麗。スコアは、ウィーン南西の都市グラーツで音楽協会の重鎮にあった友人に手渡され、43年間も死蔵される。このプロセスが最大の謎なのだが、2つの楽章で音楽は十分な内容を備えている、と考えたからこそ、作曲家は自筆譜を手放したのだろう。

第1楽章では、はやくも最低音に触れんとするコントラバスの迫力と、中間で轟くトロンボーンに注目しよう。後者はベートーヴェンの「第5」を意識した斬新な楽器法だ。花売りの歌から採られたとも言われる第2主題は、長-短の和音強打(当時「葬送」の意味をもつリズム)で断ち切られてしまう。つまりこの楽章は、「闇」における「歌の喪失」を描いている。

第2楽章の第1主題は、調も節まわしも、《冬の旅》の「菩提樹」の囁きかけとそっくりだ。まもなく孤独なさすらいが回帰するも、冒頭の主題がこれを包み込んで終わる。つまりこの楽章は、「光」による「歌の回復」を描いている。

「永遠なる至福の世界が、一挙に、まるで瞬間のうちに押しよせてくるのを僕は感じた……」総譜着手の3か月前に書かれた自筆メルヒェンのラストが、幕切れにぴったりだ。およそシューベルトほど、文学と音楽、歌曲と器楽のあいだを自在に往復して心情をあらわすことのできた作曲家はいない。その直截さには、ブラームスをはじめ後代のたくさんの作曲家が憧れた。

堀 朋平 TEXT by Tomohei Hori

作曲：1822年春～秋

初演：1865年12月17日、J. ヘルベック指揮、ウィーンの楽友協会ホールにて。

編成：フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、弦5部

10/12 SAT.

ヨハネス・ブラームス (1833～1897)

ピアノ協奏曲 第1番 二短調 作品15

1853年10月、デュッセルドルフのシューマン夫妻を訪れたヨハネス・ブラームス。シューマンは「新音楽時報」に賛賞の言葉で彼を紹介し、ブラームスの名は一躍ドイツ中に知れ渡った。シューマン自身は次第に幻聴や不安定な精神状態に悩まされ、1854年2月ライン川に投身自殺を図り、その後エンデニヒの精神病院に移る。ブラームスはシューマン家のすぐ近くに住み、生活費と治療費のために演奏旅行に明け暮れるクララの留守を守り、子供たちや病院のシューマンの様子を旅先のクララに伝えていた。

このピアノ協奏曲第1番は1854年3月に3楽章構成の『2台のピアノのためのソナタ』として書かれたものが原型である。クララとよく演奏したが2台ピアノという形態に満足できず、交響曲にまとめようとして行き詰まった。親友のヴァイオリニスト、ヨーゼフ・ヨアヒムやクララのアドバイスなどを入れながら、ピアノ協奏曲として1856年10月に第1楽章を、12月に第3楽章を完成している。恩師シューマンへの尊敬の念と、その妻クララへの若者らしい激しい恋愛感情との相克が、狂おしい程の響きと美しい旋律を作っている。第2楽章は当初スケルツォで書かれていたが、1857年1月、アダージョに新たに書き直されて完成した。草稿にはラテン語で祈禱文の一節『ベネディクトゥス』が引用されており、1856年7月に亡くなったシューマンへの追悼とも、また夫を喪ったクララへの慰めとも考えられる。ブラームスはクララへの手紙の中で、この2楽章について「あなたの穏やかな肖像画を描きたいと思って書いた」と述べている。

1859年の初演当時は不評に終わっているが、1861年にはブラームス指揮でクララが演奏。1878年ライプツィヒの演奏会ではブラームス自身が演奏し大成功を収めている。

ブラームス自身がピアニストであったため、かなり卓越した技術が必要とする。特に第1楽章の『ブラームスのトリル』と呼ばれる、右手のオクターヴと一つ上の音とのトリルが、力強く頻繁に現れるのが特徴である。ブラームスの意気込みがこの協奏曲全体にみなぎっていて、彼の初期の代表作として認知されている。

ちなみに、今年クララ・シューマン(1819～1896)の生誕200年に当たり、ドイツはもとより日本においても彼女の作品を取り上げたコンサートが数多く開催され、その音楽が注目されている。

川嶋ひろ子 TEXT by Hiroko Kawashima

作曲：1854年～1858年

初演：1859年1月22日ハノーファー宮廷劇場、作曲者ブラームス自身の独奏ピアノ、ヨーゼフ・ヨアヒム指揮ハノーファー宮廷楽団

編成：独奏ピアノ、フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、ティンパニ、弦5部